〈特集〉太平山をめぐる歴史と文化

「古代の太平山と山岳信仰」

渡辺　瑞穂子

一、はじめに

太平山神社は、かつて太平山大権現と称し、神仏習合の聖地とされた。今も拝殿前石段から三光鳥居を仰ぐと、扁額には旧社名の三光神社とある。古縁起の祭神は日月星の三光天子で、本地は虚空蔵菩薩である。

三光とよばれる日・月・星に対する信仰は、どのような形で存在をあらわし、太平山でまつられたのだろうか。天正の兵火で社殿が灰燼に帰す前の史料や威容は憶測するより他ない。後世の社伝から崇敬の歴史を推し量るばかりとなっている。断片からいにしえに思いを馳せつつ、当該の山岳にまつわる神仏信仰の成立と系譜について拙いながら考察をこころみたい。

二、三輪流神道にみる三光

現今の祭神は、文明年間の神扉の文によると、天孫命、皇大神、豊受大神の三座である。一説によると、天長四年開山説をもつ慈覚大師円仁が師の最澄の奉斎した、三輪神社を遷座した可能性がある。末社六十餘座を伊勢神宮より遷し、伴社四十二社、末堂二十宇、末社神領四十二郷があったことが棟木に記されていた。[1]

栃木市総社町には大神神社がある。『三代実録』元慶四年（八八〇）に下野国三和神への神階奉授の記録があり、古代から当地一帯の三輪の神への崇敬をうかがわせる。[2]

大和の三輪山（大神神社）は、古来より本殿をもたず、山岳への原初的な信仰を基層にもつ。元伊勢の諸宮の発祥地にあたり、伊勢の大神とは中世に同体説があった。『三輪流神道大事口決』[3]には、「三弁宝珠ハ日月星ノ三光ヲ合テ三輪ノ神ト云ナリ」とある。「此昔シ弘法大師此山ニ参籠テ、八処明神ノ本地供ヲ修シ玉フ時、明星天子降臨シ給フ。今其所ヲ星降ト云。亦大己貴尊現レシ月ト給故、此ノ三光ヲ合テ三輪ノ神ト云ナリ。」三弁宝珠は日月星の三光を表すものとして、三光を三輪の神とした。弘法大師と明星については後述する。

三光について、『三輪大明神御神徳物語』に「三輪大明神は三光和合の御神徳、天にては月日星と現し玉ひて御利生無量無邊也」とある。その詳細を記す『三輪流神道深秘鈔』では、三輪流神道灌頂で大神は「三光ノ主徳ヲ具シテ神魂ヲ主ドリ」、三輪の御利生は「三才和徳」で「三輪大明神三光ノ御神也、三光トハミツ花表ノ日月二十八宿ヲ拝スベシ」とある。[4]

これによると、月の軌道（白道）にあたる二十八宿の星座を信仰対象とする言説が認められる。神奈備の三輪山で真言を唱え斎き祀る三輪流神道には、明星のほか、日月と星々とを崇拝対象としたことがうかがわれる。

三、太平山権現と虚空蔵信仰

寛永十二年（一六三五）の『太平山伝記』の「古法太平三所」に「御本地虚空蔵　太平大権現御神体　天孫太神・明星御相殿二神、御本地大日　熊野大権現御神体　伊弉冊尊・日輪御相殿二神、御本地千手　日光

大権現御神体　大己貴尊・月輪御相殿二神、右天正十四丙戌ヨリ於同殿也」とある。太平大権現の本尊が虚空蔵菩薩、大日如来、千手観音の三像で、相殿には天孫太神（瓊瓊杵尊）・明星の二神が祀られていた。[5]

神仏が混在した明治以前には、太平大権現社および本尊の虚空蔵菩薩を安置した本地堂をはじめとする堂宇が並んでいた。

山麓に虚空蔵堂が現存する連祥院は円仁創建説をもつ、太平山の別当寺院の一だった。鎌倉時代作の虚空蔵菩薩像は、寺伝によると聖徳太子作で、慈覚大師円仁が夢の中で観見し淳和天皇に請い大平山に遷した、とする。神仏分離により虚空蔵菩薩は旭岳へ遷された後、現在の連祥院本堂に安置されている。[6]

四、求聞持法の月

虚空蔵菩薩を対象とする密教修法には『大虚空蔵菩薩念誦法』、『五大虚空蔵菩薩速疾大神験秘密式経』、『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』などがある。このうち山林修行との関連が最も論じられてきたのは『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』（虚空蔵求聞持法）である。

虚空蔵菩薩を本尊とする虚空蔵求聞持法は、記憶力を増大させる法である。荒行の後、一度耳目に触れた経典を暗記できる効験を得るという。その修法は、清浄な山中で真言を一日一万遍・百日間で合計百万遍唱えるもので、密教修法の中でも最大級の命がけの難行が求められる。

『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』は、天竺の法を善無畏が漢訳したものを養老二年（七一八）に、道慈が日本に伝えたもので、[7]本来は本尊に木檀をしつらえて修法し、日蝕・月蝕の日に陀羅尼を唱えながら酥を作ることで成満した。

『國譯密教』[8]の「國譯佛説虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法」によると「若し法の如く此の陀羅尼を持し聞持を求めんと欲せば、當さに絹素白氎或は淨板の上に於て先づ滿月を畫き、中に於て虚空菩薩の像を畫くべし」とある。まず、満月を描いてから、その中に虚空菩薩像を描く。そして、「誦せん時には目を閉ぢて想へ、菩薩の心上に一の滿月あり、然も誦する所の陀羅尼の字、滿月の中に現じてみな金色と作

る、其の字復た滿月より流出して行人の頂に澍ぐ」「至誠に瞻仰して便ち坐しながら禮拜せよ、目を閉ぢて復た滿月の菩薩を觀ずること極めて明了にし已て」とあり、虚空蔵菩薩の図像ならびに行法そのものに満月は大きく関わっている。さらに、「復た日蝕或は月蝕の時に於て、力に随ひて飲食・財物を捨施して三寶に供養す」とある。さらに、記憶を増大させる秘法は、赤銅色をした満月の夜に酥（蘇）とよばれる古代チーズを生成する。法の成就する日は日蝕あるいは月蝕と定める。日蝕は必ず新月であり、月蝕は満月に起こる天体現象である。なお、太陽と月の軌道の交点が近い関係で、日蝕前後の満月の時に月蝕が起こる。月は絶えず満ち欠けを繰り返す。その中で、月によって太陽が虧け、あるいは太陽によって月が赤く翳る特別な時が、法成就の要素とされている。

虚空蔵は、宇宙の如く広大無限な空間である虚空の母胎という意味をもつ。月輪は、曼荼羅や参詣図等の仏教美術に頻繁に用いられ、満月は縁起や伝承にも登場する。このため、満月は虚空蔵に限ったことではない。しかし、この求聞持法に関してはとりわけ月輪中に菩薩を描くことに始まる。「白月は山に入り虚空蔵法を修」（『元亨釈書』）したとあるように、月に祈りを捧げることで無限の叡智を得る修法と考えられる。

儀制令太陽虧条によれば、日蝕は国忌同様に廃務が定められている。蝕は、帝位を象徴する太陽におこる現象の中で不祥とされた。天体観測と記録は、七世紀から行われていたことが考えられる。太陽と月の交点を求めるための天体の位置計算については、史書の律暦志等に暦法が記されているが、日月蝕の記録については、養老四年に完成した『日本書紀』に見える。皇極天皇紀二年（六四三年）には、観測できないのに月蝕の予測値が記されている。皇極天皇二年五月十六日の月の入りは午前四時五〇分で、飛鳥から見えない。このことは当時の暦法である元嘉暦の計算で算出される。月入後に食が開始するため、日本では観測できない。記事の引き写しが考えられる周辺国にもこの日の月蝕記録はない。しかし、皇極天皇紀には月蝕の予報値が記載されている。[9]

なお、求聞持法招来者で、大安寺伽藍造営を勾当した事で知られる道慈は『日本書紀』の編纂に関与したと

考えられている。

五、明星来影

一方、求聞持法は奈良で自然智宗と習合し、山林修行者による自然智習得の修法となったと広く認識されている。とりわけ『三教指帰』序文に、空海が一沙門[10]からこの修法を授けられて四国の山中で実修、真言百万遍を誦し、ついに「明星来影」して体得、経典暗記の叡智を授かったという。この体験を先蹤とし、栄西や覚鑁をはじめ、多くの行者が山岳修験で厳修した。空海の「明星来影」の影響は大きく、中国の「虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法」とは異なる日本独自の行法が発達した。日月蝕の予測やその意味はあまり知られておらず、明星の来迎が重視されて、むしろ日・月蝕時の成満にかかわらない修法として広まったと考えられる。[11]

『三教指帰』にみえる空海の求聞持体験以降、明星出現は成満の象徴とされた。『渓嵐拾葉集』巻二十二「求聞持事」（正和五年・一三一六年）には、「明星とは理智相称の本源、妙成就の至極なり。凡そ世界建立の義を談ずるとき、日月星宿を以て三部の大日と習ふなり。所謂日月は両部遍照の大日なり。星宿とは不二妙成就の本就の本尊なり」とある。そして、明星は、「陰の極り」の丑の刻の終わり（午前三時頃）に出て、「陽の始め」の寅の時（午前四時頃）に大きく光輝く。明星の顕現は、相反する陰陽を繋ぐ不二の力としている。

この法をめぐる特異な口伝（「葉上流秘伝」）が多く残される栄西は秘乳を精製する水を取る作法を寅刻に行った。龍が海底で水を吐く時刻と明星天子が顕現する時刻とが対応しているという陰陽道的認識は、求聞持法本尊（虚空蔵菩薩＝明星天子）が水精龍王に乗る像容として画かれることにもよく示されている、という。[12]

六、妙見信仰の影響

妙見信仰は、中世以降の史料にしばしばあらわれるが、古代以来の星辰信仰である。妙見は北辰・北斗への菩薩信仰をさす。北天に輝く不動の北辰は天子が受命する天意を表し、それを周回し水平線に沈まない北斗七星は、帝位を象徴する袞冕十二章に見られるほか、

航海の道標とされ、安全祈願の対象となった。とりわけ延暦年間以降は妙見信仰が盛行した。

円仁の『入唐求法巡礼行記』によれば、承和五年（八三八）六月二十九日に遣唐使船が座礁した際、沈没を恐れた大使の藤原常嗣が碇などを海中に投棄し、観音菩薩と妙見菩薩の名を称えて助けを求めた。翌年の三月三日夜には、大使らは妙見菩薩と四天王の供養をしたことが書き留められている。

当時、蔵人頭として仁明天皇に近侍していた藤原常嗣が妙見菩薩を内裏でまつる「御燈」（北辰祭）に参列していた可能性が指摘されている。[13] 三月三日と九月九日に行われる北辰祭の「御燈」の北方の霊場は天台宗の諸寺院が選ばれていることなどから、円仁をはじめ遣唐使に妙見信仰は広く知られていたと考えられる。

『日本霊異記』で延暦二年（七八三）八月の事にみられるように、妙見信仰では海難救助を祈願した後、自分と同じ身長の妙見菩薩を作り、あるいは画像を作成させ、燈明を献じて報賽する。

一日の始まりは暦の上では子刻であるが、明星の顕現する寅刻は、宮中の儀式上で一日の始まりとする慣習がある。元旦の最初に行われる四方拝は、寅刻に御親拝で、北斗七星中の守り星である属星へ御燈が捧げられる。

寛永十二年（一六三五）の『大平山伝記』によれば、慈覚大師が山中に入ると「北斗七星」が眼前に現れて「方五里ヲ以テ結界スベシ」といって身を隠した。大師が「本地之真身」を見たいと思って念ずると、山中に金色の光を放つ虚空蔵菩薩が松樹の上に現れた。このことを淳和帝に表奏したところ、帝から「太平大権現」の宸翰の額と「社頭修造費」として「荘田若干」が附与されたという。太平山の妙見信仰は、後世の影響も否定できないが、創建伝説の残る円仁と深い関わりがあった可能性が考えられる。

七、日光修験における星辰

虚空蔵菩薩と明星の修法上の結びつきは、日光修験の興隆により色濃くみられた。『日光山志』によると、勝道七歳のとき夢に明星天子が現れて二荒山の開山を教示した。「是虚空蔵の垂迹なり。天に在ては大白星

とあらハれ、此土に来下しては磐裂の荒神なり」と告げたという。『補陀落山建立修行日記』は、勝道の日光開山を明星天子と深沙大王の教導によるとする。

日光山では虚空蔵菩薩が明星や妙見菩薩或いは太白星と混用され、星に対する信仰が早くにあったとされている。戦国時代には毎月十三日に星宮講が行われていたことが『年中行事帳』に記されている。[14]

二荒山を中心に横根山石裂山等の山岳によった宗教者が、求聞持法の伝流とそこから派生した明星天子を意識したことは『開山勝道上人和讃』などに求聞持法と明星天子がしばしば表れることからも肯ける、とする説がある。[15]

都賀郡の「日光山往古社領六捨六郷」と呼ばれた日光山所領では修験が行われていた。太平山は古峰に至る抖擻路の入り口に当たった。栃木市平井町の向山はかつてコクゾウ山と呼ばれ、勝道の伝承が残されている。

太平山神社境内社の星宮神社は、天加々背男命をまつり、往時の名残りを留めている。

近辺の星宮神社は太平権現を勧請したとの伝承があり、太平山神社が地域の虚空蔵信仰の中心であったことを窺わせている。これらは、中世に日光修験が活動した日光山所領で虚空蔵信仰が広がった。太平神社と加蘇山神社の祭神である磐裂・根裂神がその山麓の平野に分布する星宮神社の祭神となったとする説がある。[16]

こうした日光修験の影響により、虚空蔵・明星・妙見への信仰がさらに重層化し、近隣地域に伝播し独自の変容を遂げたと考えられている。

八、おわりに

時代と共に重層化した虚空蔵信仰は、虚空蔵求聞持法の経典に拠れば、虚空に浮かぶ月に深くかかわる修法を本義的にもつ。初期の段階で空海の神秘体験から明星によって霊験を授かるとされた。その上に、奈良末より隆盛した妙見信仰の北辰・北斗の星辰崇拝とも重なった。さらに、三輪流神道にみられる三光として、明星、妙見などの星を総称し、日・月と等しく相並ぶ崇拝対象となった。あるいは、日光修験の影響から星辰信仰の様々な要素が深められたのであろうか。

山岳崇拝の濫觴を語る史料は災禍等に遭い、悠久の時の中で失われた。それでもなお、新しい伝承を紡ぎ、変容しながら人々が崇め続けたことがうかがわれる。登拝の霊地として様々な神仏混交要素をもつ太平山では、崇敬が風土景観と合致した相応しいものへと淘汰されつつ、今も先人の祈りの足跡を幾重にも残しているように思われる。

註

1　田代善吉『栃木縣史　巻三　神社編』臨川書店　昭和九年　一四八頁。

2　仁和元年（八八五）には、三和神祇に従四位下が奉授される。下野の神階については、岡田荘司編『古代諸国神社神階制の研究』（岩田書院　平成十四年）参照。

3　大神神社史料編修委員會『大神神社史料第五巻　三輪流神道篇　乾』昭和五三年　五三七頁。

4　大神神社社務所編『三輪叢書』昭和三年　四〇頁。

5　影山博『栃木県神社の歴史と実像』随想社　令和元年　二〇八～九頁。

6　笹本正治『山岳信仰伝承と景観―虚空蔵山を中心に―』令和四年　岩田書院　二〇九～二一〇頁。

7　『扶桑略記』養老元年に、善無畏の来朝伝説が見られる。

8　國譯密教刊行會『國譯密教　経軌　第五』大正十二年　一六三～一七〇頁。

9　落合敦子、渡辺瑞穂子、相馬充、上田暁俊、谷川清隆「『日本書紀』皇極天皇二年五月十六日の月食記事と元嘉暦」『国立天文台報』十五巻　平成二四年。

10　大安寺の勤操と伝えられる。虚空蔵求聞持法は、請来者の道慈から大安寺三論宗の正統派の善議、勤操に相伝し、やがて空海の山林修行を喚起する原因となった。薗田香融「古代仏教における山林修行とその意義―特に自然智宗をめぐって―」『虚空蔵信仰』雄山閣　平成三年　一四三～一六〇頁。

11　八田幸雄「虚空蔵求聞持法とその展開」岡田重精『日本宗教への視角』東方出版　平成六年　二四九～二五一頁。

12　小川豊生「修験と胎生　中世天台教学との接点をもとめて」『現代思想　陰陽道・修験道を考える』青土社　三〇一～三〇三頁。

13　酒寄雅志「円仁と『法華経』」『日本文化研究』創刊号平成二八年一七～一九頁。

14　影山　前掲書（註5）二〇六～九頁。

15　佐野賢治「星と虚空蔵信仰」『虚空蔵信仰』雄山閣平成三年一一〇～一一一頁。

16　影山前掲書（註5）二〇八～九頁。